
とある追憶の暗殺装置《アサシンデバイス》

ポリゴン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アサシンデバイス
とある追憶の暗殺装置

【Nコード】

N17090

【作者名】

ポリゴン

【あらすじ】

およそ十年前。

上条当麻が学園都市に引っ越して来た直後。

御坂美琴が超能力者（レベル5）として活躍するより昔。

これは七人の「旧」超能力者（レベル5）と一人の無能力者（レベル0）の物語だ。

序章（前書き）

他の作品を早く完結させなければならぬのですが、思いついたので、つい書いてしまいました。

細かい設定とかはまだあまり考えてないので、本格的なスタートはだいぶ先になりそうですが、あまり期待せずに待つて頂けたら嬉しいです
m (_ _) m

後書きには旧レベル5の簡単なデータを書いておきました。

矛盾とかあるかもしれませんが、ご容赦下さい。

序章

深夜一時

学園都市

男は追われていた。

「クソ……ここまでか……」

男は呟く。

学園都市上層部に従う、暗部組織の一つに所属していた彼は、任務の中で学園都市の秘密を知ってしまい、現在追われる身となっていた。

追跡部隊が男に追い付いた。

「……………」

部隊が男に、銃口を向ける。

男は何も言わない。

黙って、過去に思いを馳せた。

短くも楽しかった日々。

自らの手で壊した、懐かしき日々。

「何をどこで間違えたのかな……………」

男がそう呟くと追跡部隊は引き金を引いた。

銃弾は男の体を貫いた。

序章（後書き）

旧レベル5

第一位 赤原仁一

能力 ハードメタル 絶対鋼鉄

第二位 へに 羽岡紅

能力 クロンデバイス 複製装置

第三位 向ヶ岡一美

能力 ドレイン 能力書換

第四位 不明

第五位 丸味英虎

能力 ハイパーソング 超絶歌唱

第六位 飛鳥井霧子

能力 エアロダンサー 空中舞踊

第七位 本名不明

能力 オーバーヒート 過剰発熱

今後ともよろしくお願いします。

第五位編 第一話 歌うヲトコとプレゼント

「うーむ……………」

学園都市に住む、七人しか居ない超能力者（レベル5）の第五位、丸味英虎は苦悩していた。

「どうしたもんか……………」

グラスンに細身の白いスーツ。服の上からでも分かる程、鍛え上げられた肉体。

一見するとどこかの極道のようだが、れっきとした十七歳。

そんな彼がおもちゃ屋のショーケースの前で低いトーンの声で、三十分程前から唸り続けている。

「うーむ……………」

もうすぐ誕生日を迎える従兄弟。その従兄弟へのプレゼントを選ぶためにやって来たが子供の好きそうなものが分からず、困り果てている。

それが今の彼の状況である。

「うーむ……………ん？」

唸り続けていると、どこからか怒鳴り声のようなものが響いた。

声のした方を見ると、どうやら路地裏から響いているようだった。

（本当についてないな……）

無能力者（レベル0）の少年、尾頭誠一はそんなことを思った。

彼は今、

七人程のスキルアウトに囲まれて、カツアゲされている最中だった。

「早く財布出せよ。結構持つてんだろ、最近の学生はよ。」

そんなお決まりのセリフをスキルアウトの一人が口にする。

どうやってこの状況を切り抜ける？

腕っぷしには多少自信はあるが、数が多すぎる。

どうしたものかと考えていると、スキルアウトの一人が

「てめえ……まさかこの人数相手にヤル気じゃねえだろうな……」

この言葉に覚悟を決めたのか、

「ああ、そうだよ。かかって来いよ雑魚共。レベル4の俺に勝てる自信があるなら、な」

などという大ボラを吹いた。

内心は（やばい、やっちゃったかも……）とドキドキだったが。

「舐めてんじゃねえぞ！　この野郎！！」

結果として大ボラは奴らの心に火を付けることになった。

（くそっ、やるしかないか……）

スキルアウト達が一斉に飛び掛ってくる。
尾頭は覚悟を
決めて体勢を整えた。が、

「こんな大人数でカツアゲとはな……情けねえ真似してんじゃねえよ、根性無し共が」

突如そんな声が路地裏に響く。

スキルアウトたちは動きを止めて、声のした方を振り返るそこにいたのは白いスーツに身を包んだ、ヤクザのような男。

「なんだ、てめえ……」

「おまえらみたいな根性無しに、名乗る名前はねえよ」

男はそう言つとこちらに近付いてくる。

「どうやら死にたいらしいな……」

男の言葉が頭に來たのか、スキルアウトたちは尾頭から離れて、男を取り囲む。

「おい、坊主」

男はこちらを見て

「ちょっと耳塞いでろ、しっかりとな」

そう言って、軽く笑った。

「舐めてんじゃねえぞ、オラァ!!」

怒鳴り声をあげると同時に、スキルアウトたちは一斉に襲い掛かる。

男は特に構えたりする様子もなく、ただ思いっきり息を吸った。

そして

「
■
□
●
○
！
！」

全く聞き取れ無かった、大きな叫び声。

それと同時に衝撃のようなものが尾頭の身体を突き抜けていき、余りの衝撃に思わず目を閉じる。

尾頭が目を開けると、スキルアウトたちは、先程の衝撃をもろに食らったのか、吹き飛ばされて気絶していた。

「まったく、根性が足りねえな」

男はそう言つと、こちらを見る。

「大丈夫か、坊主」

「は、はい。 おかげさまで……」

「そうか、それなら良かった」

それだけ言つと、男は立ち去ろうとした。

「あの！」

尾頭は堪らず声をかけた。

そして男に尋ねた。

「あなたは一体……」

「……名乗る程の者でもねえが、」

そういつて言葉を一旦切ると、

「超能力者（レベル5）第五位、
> 超絶歌唱く
って言えば分かる
か？」

これが全ての始まり。

一人の無能力者と七人の超能力者の物語。

後に、皆の記憶から消え去る運命の物語は、

ここから始まった。

第五位編 第一話 歌うヲトコとプレゼント（後書き）

アニメ第二期放送開始ということで、テンションが上がって書き上げてしまいました。

「第五位編」や「第七位& a m p・第六位編」といった感じで、いくつかに分けて書いていくつもりです。

本編のキャラも出していく予定です。

今後ともよろしく願いますm (_____) m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1709o/>

とある追憶の暗殺装置《アサシンデバイス》

2010年10月14日13時07分発行